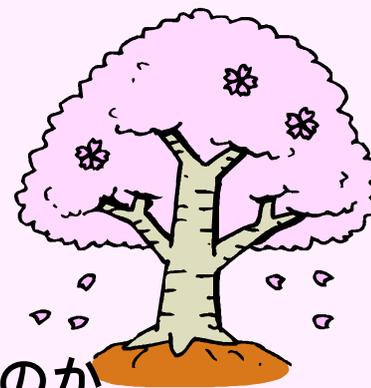


ひらけ「魔法」の言葉たち！

王国初日。気持ちは新入生。

たくさんの新人さんをお迎えし、かぼちゃの馬車を仕立てて
60名元気に発進しました。



今学期はセッション登場の全作品をお届けしますので、
ご自分なら、どの作品を推すか、どれが東工大生のお気に召したのか
比較しつつお楽しみください。作品のあとにコンテスト結果と全講評を添えます。
「ユーザアンケート」欄から作品感想をいただければ作者さんにお届けします。
まだまだ未熟なコラムニストさんたちに愛のムチをぜひ。

「ありがとう」

人々はその言葉を口にする。

自分に生を与えてくれた両親に、いつもそばで支えてくれる親友に。

ペンを落として拾ってもらったとき、見知らぬ人の厚意を受けるとき。

そんな些細なことでも、人々はその言葉を口にする。

その一言は、誰もが当たり前前に使うけど。

その一言で、知らなかった誰かにつながることもある。

その一言で、報われない気持ち救われることもある。

時代に合わせ、「サンキュ」「ありがとう」と形を変えてはいるけれど。

もとをたどれば、めったにない奇跡を目にして、神仏や自然への畏怖と感謝をこめて使われた言葉。

それは色んな奇跡を起こす、世界で一番小さな魔法の言葉。

その少年の夢は立派な魔法使いになることだった

立派な魔法使いになって人の役に立つことが夢だった

まほう使い、まほう使い

りっぱな、りっぱな、まほう使い

とんがりぼうしを頭にかぶり

しろくろマントをみにつけて

ほうきにのって、空をとぶ

くものむこうに、わたのむこうに

まほう使いはとんで行く

まほう使い、まほう使い

りっぱな、りっぱな、まほう使い

くろくろ森の、そのおくに

人形使いがすんでいた

人形たちが、わるさをする

うわさを聞きつけ、まほう使いは

くろくろ森に、ひとつとび

まほう使い、まほう使い

りっぱな、りっぱな、まほう使い

やっぱり、やっぱり、人形使い

わるいまほうで、人形あやつり

みんなにいつも、いたずらばかり

まほう使いは、氷のまほうで

人形使いをこらしめた

まほう使い、まほう使い

りっぱな、りっぱな、まほう使い

こんどはちよつぱり、へんてこなうわさ

まいばんネコが、おおぜいで

どこかでこっそり、パーティーしてる

まほう使いは、こっそりと

のらネコのあとを、おいかけた

まほう使い、まほう使い

りっぱな、りっぱな、まほう使い

そらには、まん丸お月さま

まっくろくろな、よるの中

ネコがみんなで、パーティーしてた

まほう使いは、音のまほうで

ネコといっしょに、なかよくダンス

まほう使い、まほう使い

りっぱな、りっぱな、まほう使い

きんきゅうじたい、きんきゅうじたい

さむーいさむい、北のいずみで

いずみのようせい、なっている

うわさをきいた、まほうつかいは

マフラーをして、しゅっぱつだ

まほう使い、まほう使い

りっぱな、りっぱな、まほう使い

いずみのようせい、えんえんえん

いずみがこおって、でられない

まほうつかいは、ほのおのまほうで

いずみの氷を、とかしてあげた

いずみのようせい、やつとわらった

まほう使い、まほう使い

りっぱな、りっぱな、まほう使い

まほう使い、まほう使い

りっぱな、りっぱな、まほう使い

その少年は成長して絵本作家になった

少年は立派な魔法使いになれないと気付

いたから

少年は物語の主人公にはなれないと気付

いたから

狙いの赤信号

近所に押しボタン式の信号機がある。

ボタンを押して待っているると車道の信号が赤になり、

その後、歩行者用の信号が青になるという、横断歩道の信号機だ。

その信号機に一人の少年がやってきた。近くに住む子供らしい。

彼はボタンを見ているのに押しそうとしない。

しばらくして、他の人がそのことに気づいた。

その人がボタンを押そうと近づいたところ、

少年はようやく押しボタンを押し、

その瞬間に車道の信号が黄色に変わった。

すると一台の車が信号で止まってたまるかとばかりにスピードを上げ、

信号が赤になる寸前に通過した。

その後、ボタンを押した少年はその車を睨み付け、

舌打ちをして横断歩道を渡った。

…どうやらその子供は特定の車を赤信号で止めたかったようだ。

この押しボタン式の信号機では、しばらくボタンが押されないでいると、

ボタンを押した瞬間に車道の信号が変わるようになっていく。

このことを利用すれば、非常に迷惑なことではあるが、

特定の車を赤信号に出くわさせることもできそうだ。

これは車を選んで「金縛り」にさせるといって、

一種のゲームの感覚であろうか。

彼は自身で何かを支配したいと思っているのかもしれない。

魔法を手にした男

この世に生まれて二十三年。この男が魔法を手にしたのは、何気ない夜だった。突然見知らぬ人から手渡された魔法。はじめはすぐに捨てる気だったこの男だったが、恐怖よりも興味が勝り、一度使ってみることにした。どういった魔法かということも、全く知らないままに。

その効果は、翌日に現れた。

アルバイト先で気になっていた人から、何の前触れもなく告白されたのだ。生まれて二十三年、彼女など一度もできたことはなかったし、この人とは連絡先どころか、会話をえろくにしたこともなかったのに、だ。彼は突然の幸運に喜ぶとともに、確かな『魔法』の効果を実感したのだった。

その後、男はこの魔法を濫用しはじめた。学生時代に想いを寄せていた相手やテレビで何度も見たアイドル、道端で偶然目があつた女性。果ては友人の彼女まで、男が彼女にしたいと思った人は、だれかれかまわず手に入れた。すべては魔法の力。その力は、以前の関係は後腐れ無く終わらせることができ、使用者本人が望めば二股すら可能だった。そして、彼女を相手にわがまま放題の生活を展開した。そんなことは、魔法にかかれれば簡単に許される行為だった。彼はこれまでの鬱憤を晴らすかのように遊び続けた。

そうした暮らしが一年ほど続いたある日。男はこの魔法を封印する決意を固めた。彼はようやく気付いたのだ。『魔法』に従う女性の顔に、笑みがなかったこと。そして、お互い幸せにはならないこと。男は、最後の魔法で付き合っていたすべての人との関係を終了させ、この魔法を誰も見つけることの出来ない場所へおいやった。やり遂げた男の心中に、ほのかな充実感が漂っていた。

こうしてこの男は、以前の生活に戻った。以前と変わらずモテることはなかったが、新しい目標ができた。「自分の力で彼女をつくって、そのひとを大切にする」と。

わがいきびとじ

なんて事無いいつもの帰り道だった。家への近道の狭い路地裏。そこに立っていたのは変な奴だった。

「あなたの願いを一つ、叶えてあげる」

自称、魔法使いだと言う。確かに紫がかった紺のトンがり帽子にマント。しいて言うなら魔法使いだろう。が、この西暦2006年にそんなものがある筈が無い。きつと気でも触れているのだろう。かかわらないに越した事は無い。

「ダメ。会った以上は一つ、願いを叶えないといけない」

そいつは両手を広げて俺の進路をふさいだ。狭い道だからそんなことをされたら押しの手でもしない限り通れない。いかにキ〇ガイとは言え女に手を上げるのは躊躇われるし、すでにうちの近所まで来ている。うちの近所は噂が伝わるのが異常に速いのだ。迅速だ。音速だ。光速だ。

「へいじゃあ、そこを通せ」

「そいつは適当なのは、ダメ」

いったいどういふ基準なのか。そいつ曰く「私が決める」との事。なんだそれ。いいから通せ。俺はお前のようなキ〇ガイと付き合ひが有るといふ噂だって立てたくは無いのだ。

「じゃあ」

「そいつはつちぢなのはなし」

くそ。やっぱり読まれてたか。いや、やりませんよ？おっけーでも。言ってみただけだって。……信じてねーな。俺はそんな噂立って欲しくないんだって。洒落になんねーし。

「自分でわかってる、と思う」

困った顔をして言うが、わからんしお前がどいてくれないから俺は困ってるのだ。正直お前がどいてくれればそれで良い。そう思っているし、そいつはため息をついて俺の後ろを指差した。確かそっちに有るのはこの町で一番大きな桜の木。だが今は十月。花どころか葉も無いはず。そもそもたしかあの木は何年もの

そこに有ったのは満開の桜の花。小さい頃一度見たきりの。そういえば、もう一度見たい、とずっと願っていた。「いっぱい勉強してあの木を治してあげるんだ」とか言った気もする。当時は凄本気で。中学校、高校、大学と忙しい日々の中で忘れて、どうしてこんな所にいるのかも分らなくなっていたけれど、いつかまた会いたい、と思っていたんだ。もう、頑張ってみるか。

振り向くと、彼女はいなかった。桜の木も、元の花も葉も無い木になっていた。結局なんだったのか。でも、いい魔法をかけて貰った気がする。

大切なことはなんですか

誰もがため息をついてしまうような美しさですか

思わず笑顔になるような可愛らしさですか

すれ違った人が振り返るようなスタイルの良さですか

透き通るような肌の白さですか

いつまでも穢れることの無い純粹さですか

周りを元気にすることの出来る明るさですか

誰もが笑ってしまうような面白さですか

守ってあげたくなるか弱さですか

どきつとしてしまうような女らしさですか

たった一つだけ願う事が叶うのならば

何一つ兼ね備えていない私は何を願えばいいのですか

「やめ……て、おねが、い」
途切れ途切れのか細い声。驚きと恐怖に染まった青白い顔。その全てを感じながら、俺は両手に力を籠める。面白いほど簡単に、白く華奢な首は絞まっていった。

魔法使い

俺の裏に明るさを感じ、俺は目覚めた。そのまま見上げると、カーテンから部屋に洩れ射る朝日が目に入った。嫌な夢を見た。けだるい体を起こし、一つ欠伸をする。

「起きろー。朝だぞー」

傍らの布団の膨らみに声をかけ、布団をまくる。いつもと変わらない彼女が、体を丸めてそこに眠っていた。しょうがないな、とため息をついて、優しく肩をゆする。暫く続けると、やっとその喉が開いた。

「ん……もう朝？」

「ん、もう朝」

寝ぼけ眼でゆっくりと瞬きを二回。ようやく目が覚めたのか、彼女は横になったまま、うーんと伸びをした。一瞬、その表情が、夢で見たあの顔と重なり——頭の後ろ側にチクリと痛みが走った。

「——ッ」

「大丈夫？ どうかした？」

顔をしかめた俺を氣遣い、彼女は心配そうな目を向ける。刺すような痛みは一瞬だけで、すぐに薄れた。

「いや、なんでもない。大丈夫だよ」

心配するようなものではないと思った。俺が笑顔を見せると、彼女も安心したのか微笑んだ。

それでも、後頭部には微かな痛みが燻り続いていた。

§

その男は名乗った。

「私は『魔法使い』だ」

薄暗い路地裏の電灯の下、つばの広い黒帽子の下にあるはずの素顔が、どうしても見えなかった。

本当に魔法使いなんだな、とぼんやり思った。

§

俺がファイヤーを唱えると、敵モンスターは炎に包まれ消滅した。経験値とお金を獲得し、更に歩く。

「ねーねー」

聞き慣れた声で、現実を引き戻される。横を見ると、服を引っ張る彼女。

「これいくつ？」

そう言いながら、テレビ画面と、その前の灰色の筐体を指差す。因みに雑誌懸賞で当てた。自慢。

「あー、FQのスリー。最新作だぞ」

こっちは高かったんだぞ。自慢。

「あー……へー」

興味ゼロの返答にがっかりしつつ、無言で視線をテレビに戻す。画面が切り替わり、ボスモンスターが現れた。

「あー、やばいんじゃない？」

ボスが力を溜める。くらったら一撃だろう。魔術師のコマンド一覧から、呪文を選択す

「タイムストップは？ 時間止めるやつ」

時間を止める。——時間を、止める？

利那、後頭部に痛みが走った。朝の、あんな生易しいものではない。えぐるような痛みが、次々と後ろから襲ってくる。

「ああ、あ、あああああああああー！」

頭を抱えてうずくまる。傷む部分を通して、自分の中に何かが入る。ぬめりと、感触。ああこれは——記憶？ 遠くに彼女の声が聞こえる。半狂乱。『大丈夫？』何度も叫んでる。心配してる。安心させてあげたいのに。落ちかける意識の中、大丈夫だよと手を伸ばし、その伸ばした手の先で、俺は最後に何かの倒れる音を聞いた。

俺が望んだのは何だったけ。

俺が手に入れたのは何だ。

目覚めると、部屋。テレビ画面の中で、ゲームオーバーの文字が揺らめいている。

傍らを見ると、倒れこむ彼女の姿。その顔色は、とても生きている人間のものではなく、首には青紫の痣。

近付き、脈を取る。ひんやりと冷たく、脈動は無い。

そうだ、全部思い出した。

§

俺の前に『魔法使い』が現れたとき、俺は時間を止めるように頼んだ。彼女との幸せな生活がいつまでも続くように、と。そして、『魔法使い』は、それを了承した。

あいつは、手始めに俺に彼女を殺すように言った。何故だか疑う気持ちは生まれなかった。そうすれば願いが叶うと信じ込んだ。だから、俺は彼女の首を絞めた。

『魔法使い』はそれを見て小さく笑うと、マントの下から手を伸ばし、俺の首を絞めた。抵抗はしなかった。これで時間が止まると信じていた。

次に目覚めたとき、俺はその出来事をすっかり忘れていた。彼女を殺したことも自分が死んだことも忘れ、いつも通りの生活に戻っていった。もう止まってしまった時間の中で、長い間、同じ時を繰り返していた。

§

部屋に男の倒れる音が響く。暫くして、部屋の中央にマント姿の男が現れた。男はゆっくりと二つの亡骸を見渡すと、目を細めて小さく笑い、そのマントを翻す。

一瞬後には、もうその姿はどこにもなかった。

俺の彼女は、魔法が使える。

俺の彼女は、魔法が使える。

「ほら、ちゃんとゆっくり寝てなさいよ。」

せつかくのデートの日に風邪で出て行けなかった俺の部屋に、わざわざこうやって足を運んでくれて。

「・・・ちよっと、待っていてね。」

いつものようにドアの向こうに消える。

ドアを開けたことはない。いや、嘘。ある。開けたら前すこく怒られた。どうして待たられないの、見ちゃったら楽しみがなくなっちゃうでしょ!?

どこのツルのように消えてしまわないでよかったけれど。

そしてそこで彼女は魔法を使って、ドアを開ける。

「ほら、ゆっくり寝てなきやダメじゃない。」

どうしてあの冷蔵庫の中身が、ここまで美しくおいしくなるのかわからない。

「お前、ほんとすこいわ。」

「は、何が?」

「や、・・・お前の魔法です。いなくなって思ってた。」

「?、?、?、何言ってるの?風邪で頭おかしくなった?」

「・・・うまいや。」

「・・・ありがとう。」

どうしてあの冷蔵庫の中身で、ここまで愛しく幸せになるのかわからない。彼女の魔法に、こうやっていつもいつも、撃ち抜かれる。

「魔法」本選作品講評

1 「ありがとう」 7位 2mp

ぽつりぽつりと語られる言葉が、ゆっくりしみじみつばやくような味わい。

書きすぎると、くどくお説教っぽくなってしまいうテーマを、さらりと流して、とてもすがすがしい今シーズンセッションの始まりを飾ってくださったのは、なんとニューフェイス！ 以後よろしゅう。

2 (絵本) 3位 レベル9デス

フォントの工夫で、物語をサンドウィッチ仕立てにしたところが、意図はわかるけれど、どうだったでしょう。メルヘンの世界に邪魔な気もしました。

それほどに、絵本のなかでリフレインされる言葉のリズムがキレイなのです。

でも、いずみのようせいのくせに凍って出られない、なんてマヌケですね。地球温暖化問題へのメッセージか!?

でもって、この作品も新人さん。初登場でいきなりベスト3入りの偉業です。お茶会にもお越しくださって、「コラムの反省会じゃなかったんですか！」と啞然としておられました、まあまあまあ、空気は自分でつくってゆくもんです。以後、お見知りおきを。

イチオシフレーズ：「少年は物語の主人公にはなれないと気づいたから」「きんきゅうじたいきんきゅうじたい」

3 狙いの赤信号 5位 7mp

街角のささやかなできごと。ちょっと変わった少年の行動を「何かを支配したい」のかなと推測するところに、緻密な観察眼と、少年の気持ちに寄り添おうとする、お兄さんの暖かさを感じます。そっか実体験(舌打ち除く)なのですね。

4 魔法を手にした男 8位 0mp

導入が手抜きっぽくないですか。こんなにぼかすなら「ある日、男は魔法を手に入れた」で済ませても同じでは。

展開は予想通りなので読みやすいけれど物足りない。節目のシーンはドラマティックに盛り上げたいところ。

5 ねがいをひとつ 1位 レベル15フレア

一瞬の幻の桜樹。忘れていた、いちずな気持ち。アイディア・構成・リズムとも、おみごとです。会話のおもしろさでコミカルに展開してゆくのですが、最終シーンだけは、もっと映像的に見せてもよいのでは。振り向いたとたんに、はらり花片が、みたいに。ダメ？

何はともあれ、幸先良く初セッション首位、**桜色でおめでとう。**

イチオシフレーズ：「迅速だ。音速だ。光速だ。」「じゃあ」「そういうえっちなのはなし」と3つの班で炸裂してイチオシフレーズ大賞もさらいました。

6 * * * * * 6位 6mp

うわ、すごい。

あれもこれも、考えるほどに足りないものだらけだあ、というささやかな乙女のいらだち。とんとんとん、と畳みかけてきて、ラストでぐさ。

さてさて男性陣は、この間にどんな答えを返すのでしょうか。

ほんの一例：A班よりのコメント「もっと自分を愛しましょう」 G班「美しさが1番！」 I班「班内でどれが欲しいか盛り上がる」 だそうです。

7 魔法使い 4位 8mp

映像的にくっきり見せて、「ファイヤー」とネタも入れて、けっこう起伏のあるストーリーをきっちり納めて、うんなかなか、なのですが・・・

彼女とのしあわせの形が、勝手にテレビゲームやってる光景としてしか見えてこないのも、そんなにも凍結を望んだ「しあわせ」へと気持ちが同化できないのです。

魔法使いさんが何を望んだかも謎。

イチオシフレーズ：「やめ……て、おねが、い」(理由：実に想像力をかきたてられる)

8 俺の彼女は、魔法が使える。 2位 レベル13デス

しあわせ満開の今週の読み納め。

お料理のなかみが見えると、もっとしあわせ感あったのになあ。それこそ、おなかがすく時間帯直撃の強さを発揮できたか、と。

でも、徹夜殺人組をよそに、かる～く30分で仕上げた2位、快調なスタートです。おめでとう。